

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

解答はすべて解答用紙に記入すること。

道ばたにひっそりと咲く雑草の花に、心打たれるときがあるかも知れない。

しかし、野生の植物が花を咲かせるのは、人間に見てもらうためではない。昆虫を呼び寄せて花粉を運ばせるためである。

人知れず咲く小さな雑草の花であっても、それは同じである。すべての花は昆虫を呼び寄せるためにあるのである。

美しい花びらや甘い香りも、すべては昆虫にやってきてもらうためのものなのだ。そのため、花の色や形にも、すべて **I** な理由がある。花は、何気なく咲いているわけではないのである。

**1**、春先には黄色い色の花が多く咲くようになる。

黄色い花に、好んでやってくるのはヒラタアブなど小さなアブの仲間である。もちろん、人間には黄色い色に見えても、昆虫に何色に見えているかは、昆虫に聞いてみないとわからない。よく昆虫には紫外線が見えるという話がある。黄色い花は紫外線が少ないので、紫外線が少ないというのが、アブが好む特徴なのかも知れない。

アブは、まだ気温が低い春先に、最初に活動を始める昆虫である。そのため、春先の早い時期に咲く花はアブを呼び寄せるために、黄色い色をしているのである。

もつとも、アブが好むから黄色い花を咲かせるようになったのか、黄色い花が多くなって、アブが黄色を好むようになったのかは、

**II** で、よくわからない。

しかし、春先には黄色い花が咲き、黄色い花にアブが来るといいう植物と昆虫との約束事ができあがったのである。 **A**

ただし、アブをパートナーとするには、問題があった。

ミツバチのようなハナバチの仲間は、同じ種類の花々を飛んで回る。

**2**、アブはあまり頭の良い昆虫ではないので、花の種類を識別するようなことはしない。そして、種類の異なるさまざまな花を飛び回ってしまうのだ。これは植物にとっては **1** ツゴウの良いことではない。 **B**

同じ黄色い花だからと言って、タンポポの花粉がナノハナに運ばれても、種子はできない。タンポポの花粉は、タンポポに運んでもらわなければならないのである。

**3**、アブに花粉を運んでもらう植物は、どうやってきちんと花粉を運んでもらえば良いのだろうか。

これは難題である。しかし、野に咲く雑草であっても、この難問を解決しているのだから、すごい。 **C**

集まって咲いていれば、アブは近くに咲いている花を飛んで回る。そうすれば、結果的に同じ種類の花に花粉を運ぶことになるのである。 **D**

特に、小さなアブは飛ぶ力がそんなに強くないので、まとまって咲いていれば、近場の花を回ってくれる。

こうして、春先に咲く野の花は、集まって咲く。春に、一面に咲くお花畑ができるのは、そのためなのである。

黄色い花は、アブをパートナーとして花粉を運んでもらっていた。

一方、紫色の花はミツバチなどのハナバチをパートナーに選んでいる。ミツバチは紫色を好む。紫色の花は紫外線も多いから、ハチは紫外線を合図にして紫色を選んでいるのかも知れない。

**3** ミツバチなどのハナバチは、植物にとっては、もつとも望ましいパートナーである。

何より、ミツバチは働きものだ。ミツバチは女王蜂を中心として家族で暮らしている。そのため、自分の餌<sup>②</sup>だけでなく、家族のために花から花へと飛び回り蜜を集めるのだ。 **4**、植物にとっては、それだけ、たくさんの花粉を運んでもらえることになる。

**5** ハチは頭が良く、同じ種類の花を識別して花粉を運んでくれる。また、ハチは飛翔能力<sup>ひしやう</sup>が高いので、遠くまで飛ぶことができる。そのため、ハチが花粉を運んでくれる植物は、離れて咲いていても、しっかりと花粉を運んでもらうことができるのである。

この優秀なパートナーを惹きつけるために、ハチを呼び寄せる花は、たっぷりの蜜を用意してハチを出迎える。ところが、これには問題があった。

蜜をたくさん用意してしまうと、ハチ以外の他の虫も集まってきてしまう。せっかく<sup>③</sup>フンパツして用意した蜜を他の虫に奪われてしまうのだ。

紫色の花は、どうやってハチだけに蜜を与えることができるのだろうか。

人気のある学校に入るためには、「入学試験」というものがある。

じつは、<sup>4</sup>紫色の花も、蜜を与える昆虫を選ぶための「選抜試験」を行うのである。

紫色の花は、複雑な形をしているのが、特徴である。この複雑な形が、まさに入試問題である。

身近な雑草であるホトケノザの花を観察してみることにしよう。

ホトケノザは、スマレヤタンポポほど知られていないかも知れないが、小学校の生活科の教科書でも紹介されるほど、身近に見られる雑草である。

ホトケノザは小さな花だが、よく見ると、なかなか美しい花を咲かせている。

下の花びらには、<sup>④</sup>斑点のような模様がある。これが、蜜のありかを示す「蜜標」と呼ばれるものである。蜜標はガイドマークや、ネクターガイドとも呼ばれている。この蜜標を目印にして、ハチはこの花びらに着陸する。下の花びらはまるでヘリポートのような役割を持っているのだ。ホトケノザは、ミツバチが訪れるのには小さいが、小さなハナバチが訪れる。そして、花びらに着陸すると、ちょうど着陸した飛行機をユウドウするラインのように、花の奥に向かって蜜標が続いている。この道しるべに従って、花の奥深くへと進んでいくと、花の一番深いところに蜜があるのである。

横からホトケノザの花を見ると、花の形が細長く、花の中が奥深くなっている。じつは、この狭い中に潜り込んで行って、後ずさりして出てくるというのが、普通の昆虫は得意ではない。これに対して、ハチは花の奥深くへ潜っていくことを得意としているのである。

蜜標が蜜のありかを示すサインだということが理解できる頭の良さ、そして花の奥へと入っていくことのできる勇気と体力を持った虫だけが、蜜にありつくことができる。

こうしてホトケノザは、知力テストと体力テストによって、パートナーとしてふさわしいハチだけに蜜を与えることに成功しているのである。  
(稲垣栄洋『雑草はなぜそこに生えているのか』による)

問一 ①～⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 **I**を補うのに最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 合理的    イ 抽象的    ウ 作画的    エ 絶対的

問三 ①～⑤を補うのに最も適当な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア あるいは    イ それでは    ウ なぜなら    エ つまり    オ たとえば    カ ところが    キ さらに

問四 **II**を補うのに最も適当な表現を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 鳶とびが鷹たかを生む    イ コロンブスの卵    ウ 卵たまごが先か鶏にわとりが先か    エ 虻あぶはち蜂取らず

問五 次の一文は、**A**～**D**のどこに入りますか。記号で答えなさい。

【じつは、春先に咲く黄色い花は、集まって咲く性質がある。】

問六 ①「アブをパートナーとするには、問題があった。」とありますが、「問題」とはどんなことですか。句読点を含めて三十字以上四十字以内で答えなさい。

問七 ②「春に、一面に咲くお花畑ができるのは、そのためなのである。」とありますが、春先の野の花が集まって咲くのはなぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問八 ③「ミツバチなどのハナバチは、植物にとっては、もともと望ましいパートナーである。」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ハチは花の種類を見分けて、近くに咲く花を飛び回るため、同じ種類の花の花粉を運ぶ確率が高いから。

イ ハチは花の種類を見分けて、遠くまで飛び回り、同じ種類の花の花粉をたくさん運んでくれるから。

ウ ハチは紫色の花を好んで、集まって咲くさまざまな種類の花を飛び回り、たくさん蜜を集められるから。

エ ハチは紫色の花を好んで、遠くまで飛び回り、他の虫が寄ってこない花の花粉も運んでくれるから。

問九 ④「紫色の花も、蜜を与える昆虫を選ぶための『選抜試験』を行うのである。」とありますが、ホトケノザの花にはどんな特徴があり、どんな力を持った昆虫を選ぼうとしているのですか。わかりやすく説明しなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

こんなに大きなものがどこから流れてきたんだろう。

雅之君は遊歩道をさえぎる丸太に手でそつと触れてみた。長さ七、八メートルはあろうかという伐採材だ。ごつごつした木肌が、路面との間に灌木やゴミを巻きこんでいる。

1 バケツをさげたまま、雅之君はしばらく立ち尽くしていた。

多摩川の河川敷はどこも同じ光景だった。見渡すかぎり草花がなぎ倒され、いたるところ褐色の泥に覆われていた。植えこみの柵や草野球場のベンチなど、すこしでも起伏があるところはゴミ溜まりと化している。堆積物が雅之君の背丈ほどの高さになっている場所もあった。

泥のなかで、おびただしい数の銀色が跳ねたりくねったりしていた。拾ったバケツを雅之君が手放さずにいるのは、たとえわずかでも、これらの命を救おうとしているためだった。みな、多摩川に棲む魚たちだ。土手ぎりぎりまでの大水が引いたあと、魚たちは陸地に取り残された。泥溜まりで彼らはまだ泳いでいたが、台風の直撃から二日たった今、水はどんどん引きつつあった。

雅之君は丸太の横でかがみ、はさまっている灌木の下を覗きこんだ。そこは水がはけておらず、逃げ遅れた小魚たちが泥の泡をはじいていた。雅之君はバケツの縁を浸し、泥水をいくらかくみ取った。そして素手で小魚たちを追い、一匹ずつバケツにすくい入れていった。

A 焼け石に水というより、まったく意味のないことをしているのではないかという思いが雅之君の頭にはあった。でも、目についた魚だけでも救えるなら、その魚にとつては意味があるのではないか。そんなふうにも思えた。

バケツに魚を入れた雅之君は、バスケットシューズのままぬかるみに入り、流れの方まで歩いていった。周囲の泥のなかにもおびただしい数の魚たちがいて、雅之君はいちいち立ち止まった。手が届く範囲で元気な魚を選び、バケツにすくい入れる。

河川敷の惨状とはタイショウウ的に、空は一色に澄んでいた。真夏ほどではないが、まぶしい光があらゆるところで反射している。泥は泥として広大に輝いていた。その向こうにはどよどよと流れる褐色の帯があり、高い水位を維持したまま生き物のように躍っていた。雅之君はその多摩川の流れに向けてバケツの中身をぶちまける。泥水とともに魚たちが身をくねらせて落ちていくのが、映画のスローモーションのように見えた。

だが、だからといって雅之君はなんらかの達成感を味わっているわけではなかった。むしろその逆だった。

ほんのわずかの、数えるばかりの魚を救うために、その他の無数の魚に見切りをつけていくこと。なんとなく始めてしまったこの救援作業は、その見切りの繰り返しだった。雅之君のちょっとした判断で川に戻れる魚がいる一方、圧倒的多数はここで見捨てられ、果てていくしかない。

選ばれる命と選ばれない命。そこに違いはあるのかと考えると、雅之君にはなにひとつ言葉が浮かんでこないのだった。

もしここにバンさんがいたらどう言うだろうと雅之君は考えた。

『救えるだけ救え。それでいいんだ』

そう言いそうな気もする。

『これも自然だ。お前が悩む必要はない』

バンさんなら、そんな言葉もあり得ると思った。

ぬかるみを横切つて遊歩道へ戻りつつ、雅之君は遠くに目をやった。多摩川が大きく湾曲しているためそこからは見えなかったが、上流には長い橋がかけられた場所がある。バンさんの住処があるところだった。

雅之君が泥だらけの河川敷を歩いているのは、魚を救うためではなかった。バンさんに会うためだった。それなのになぜバケツをさげてウオウサオウしているのか、その理由が雅之君にはよくわからなかった。

自分がやらなければ魚たちはみんなひからびてしまう。それは確かだ。でも、そこを突き詰めて考えていくと、雅之君の頭には嫌いな言葉が浮かんでくる。その言葉を想像するだけで口のなかが苦くなる。だから自分の行為の意味など考えず、なにかもぼやかしたくなる。

そう。魚を救う度に、そして魚を見捨てる度に、ギゼンというその言葉はやってくる。身震いするほどいやだなと思っても、その言葉はついてくる。

こんなことばかり考えているから、そしてこんなことばかりしているから、いつも浮いちやうんだよな、と雅之君は思った。

実際、この広大な河川敷で魚を救おうとしているのは雅之君一人だけだった。遊歩道や土手に人はいた。大水でむちゃくちゃになった多摩川を見ようと、すくなくはない人たちが歩いていた。けれども雅之君が見るかぎり、もがく魚たちに目をくれている人なんてどこにもいなかった。

僕もきつと、人の本流には戻れない。はずれているんだから、人目につかないところでひからびていくだけだ。

跳ねる魚の前でかがみながら、雅之君はつくづくそう思った。かつてバンさんが放った言葉がよみがえる。

「いつも一人だな、君は」

初めて出会った時、雅之君はそう声をかけられたのだ。

それは今年の春先、やはりこの河川敷のできごとだった。風の冷たい日だったが、雅之君はスケッチブックに向かい、一心に絵筆を走らせていた。枯れた茂みのはずれに、油菜と花大根の群生を見つけたのだ。それはまるで黄色と紫のタペストリー※のようだった。声をかけられたのは、ちょうど細筆で花々を点描している時だった。雅之君は振り返った。すると、汚れた髪にひげ面の男が、笑みをたたえて立っていた。

「何年生？」

太い声だった。雅之君の腰は折り畳み椅子から浮き上がった。「こんど、中三」と答えるのがやっとだった。

バンさんは雅之君の水彩画をじっと覗きこんだ。そして目の前の花々を指さした。

「すこし前に南の風が強く吹いたろう。あれが春の挨拶だ。透き通った刷毛はけを走らせて、自分の通り道を見せていく」

バンさんは群生に近づき、花々を手でそつと撫でた。雅之君は今でも、その時のバンさんの節くれ立った指を描くことができる。

掘り出されたばかりのサツマ芋みたいな指だった。あんなにも汚れた人の手を見たのは初めてだったかもしれない。しかしなぜか雅之君は、その手を面白いと思った。油絵で描いたら凄そうだとも思った。

4 バンさんの言葉。雅之君はそこにも惹かれるものがあつた。春の到来を「通り道を見せていく」なんて表現した人に、雅之君はこれまで会ったことがなかった。同級生や両親はともかく、美術部の顧問の先生だって、決してそんな言い方はしない。寒いとか、暑いとか、春だねとか、それで終わってしまう。

わくわくする言葉というものがあるなら、雅之君は初めてそれを受け取ったような気がした。それは言い換えるなら、言葉が生きているとか死んでいるとかの感覚だったのかもしれない。普段周囲から投げかけられる言葉は、二つか三つの単語が並んだものでしかなかった。

「お前んち、親なに？」「ノート貸して」「金貸してくれよ」「高校行くの？」「テストどうだった？」「勉強しなさい」「知らねえ」「マジ？」

なくてもいい言葉ばかりだ。というより、言葉なんてなくてもいいと思っていた。クラスメイトなんていなくても自分には関係がないように、およそすべての言葉もつまらないものでしかないと思っていた。

でも、それは自分のせいかもしれない、という考えも雅之君にはあつた。

自分も同じだ。なにかを話そうとしても単語を並べるだけだ。クラスメイトがいなくてもいいのなら、自分だっていなくてもいいのかもしれない。

雅之君はバケツをさげたまま歩いた。流れが大きく曲がっているところを越えると、遠くに橋が見えてきた。大水の被害は変わらず、河川敷はどこまでも泥をかぶっていた。草地がごっそりえぐられた場所もあつた。そこには池ができていて、ビーバーの巣のように灌木が盛り上がって浮かんでいた。

台風ひとつでここまで景色が変わる。これまで慣れ親しんできた多摩川はもうそこにはなかった。雅之君はその荒涼とした風景の向こうに、つい数日前に見たばかりの夕暮れを重ね合わせていた。

5 今なら雅之君はわかつた。それはいつもの日没でありながら、ただ一度しかこの世に起きない天地のドラマだった。再来することのない光が降り注ぎ、草むらはあらゆる色に輝いていた。目をつぶれば、その鮮やかさは雅之君の内側でまだ失われず息づいている。しかし目を開ければ、それはもう永遠に現れないのだと、変わり果てた河川敷そのものが語りかけてくるのだった。

世界にも、自分にも、大きな穴があいたみたいだと雅之君は思った。そしてその穴になにかをあてがうように、雅之君はこれまでここで描いてきた絵や、バンさんがくれたいちいちのアドバイスを脳裏によみがえらせていた。

「絵はうまい。でも、うまいっただけだな。見えているものしか描いていないからだ」

6 バンさんはよくそう言った。「見えないものを描かなきゃ」と。

また泥を踏み、一匹のナマズの子を川まで戻しに行きながら、雅之君はその言葉の意味を具体的に感じ取った日のことを思い出した。川原に咲いていた紫陽花あじさいを描くうち、いつの間にか迫りだしていた雲にやられた時のことだ。

日が陰ったと思ったら、空はいきなり鉛色に変わり、水彩絵の具で描いた紫陽花に雨が直接落ちてきた。どうしよう戸惑っているうち、画用紙の上の花や葉はどんどん滲にじんでいった。あわてた雅之君はスケッチブックを胸に抱え、上流の橋まで走った。そこにバンさんたちが住んでいることを雅之君は知っていた。

7 迷いがなかったと言えはうそになる。でも、それまでに雅之君はもう何度もバンさんと言葉を交わしていた。出会った頃のような警戒心はなかった。

ブルーシートBの掘っ建て小屋の前で、バンさんは空き缶をつぶしていた。缶に板を乗せ、それを踏んでつぶす作業だった。

バンさんは雅之君にすぐ気づいた。手招きをして、「おい」と声をかけてきた。そしてまわりのホームレスの人たちに「友達だ」と紹介し、歯を見せて笑った。

「いいところきたな。今日は面白いものがあるぞ」

バンさんは空き缶から離れると、小屋の奥から透明なボウルを取り出してきた。

「今日は優雅な気分Bに浸ろうと思ってたんだよ」

ボウルには水が張られ、何匹かの小魚、クチボソやハヤが泳いでいた。他のホームレスの人たちは「またそれか」と笑っていた。「見てみな」

バンさんはボウルを持ち上げ、雅之君の頭上に掲げた。光がボウルのなかでゆらゆら揺れ、魚たちはそのきらめきに絡むようにして泳いでいた。雅之君が初めて見る魚の姿がそこにあった。胸びれや腹びれが小刻みに動き、虹を放っている。

「魚は普通、真横か斜め上からしか描かないだろう。俺たち人間が普段そうやって見ているからだ。でも、川底に目があればこんなふうに見える。角度を変えるのもひとつの工夫なんだよ。絵の技術はあるようだから、こういうのを細密画でやってみな。だれも見たことのない水の世界になる」

すごいねえ、バンさん。さすが元イラストレーターだ。

ホームレスの人たちからあがった声を雅之君は覚えている。

(ドリアン助川『台風のとて』による)

※タペストリー…壁掛けやテーブルクロスに用いる、絵画風の織物。

問一 ①②③④⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 A・Bの意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 焼け石に水                   ア 信念を曲げない                   イ 無いよりはましだ

ウ 効果があがらない                   エ 互いに交じり合わない

B 節くれ立った                   ア 赤くはれあがった                   イ 骨ばってごつごつした

ウ 荒れてざらざらした                   エ 深いしわが刻まれた

問三 ①「バケツをさげたまま、雅之君はしばらく立ち尽くしていた。」とありますが、この時の雅之君の状況を次のように説明しました。I Ⅲを補うのに最も適当な表現を、それぞれ指定された字数で文中から抜き出さない。

台風の後、河川敷に住む I (七字) ため、上流の橋を目指して歩いていたところ、 II (九字) が泥溜まりに取り残されてるのに気づき、少しでもその III (八字) いた。

問四 ①②③のうち、次の(1)～(3)の問いに答えなさい。

(1) 雅之君が初めて会ったとき、バンさんはどんな容姿でしたか。文中の表現を使って答えなさい。

(2) バンさんは、以前はどんな仕事をしていましたか。文中の言葉を抜き出さない。

(3) バンさんは、今はどんな生活をしていますか。文中の言葉を抜き出さない。

問五 ①「透き通った刷毛を走らせて、自分の通り道を見せていく」とありますが、a「透き通った刷毛」、b「通り道」とは何のことを言っていますか。それぞれ三字、九字の表現で、文中から抜き出さない。

問六 ①「バンさんの言葉。雅之君はそこにも惹かれるものがあった。」とありますが、雅之君がバンさんの言葉に惹かれたのはなぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問七 ①「今なら雅之君はわかった。それは……」とありますが、このとき雅之君はどんなことを感じたのですか。わかりやすく説明しなさい。

問八 ①「見えないものを描かなきゃ」とありますが、バンさんは普段見えていないものを見るために、どうするのが良いと教えてくれましたか。文中から一文で抜き出し、その最初の五字を答えなさい。

問九 ①「迷いがなかったと言えようそになる。」とありますが、雅之君はどんなことを迷っていたのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 普段、自分とは全く違った生活をしているバンさんを急に訪ねても、自分は受け入れてもらえないのではないかと迷っていた。

イ 約束もせずに自分の方から突然訪ねていっても、バンさんがどこかへ出かけていて、会えないのではないかと迷っていた。

ウ いつも自分の絵を見てアドバイスをくれるバンさんだが、本当は自分の絵をあまり評価していないのではないかと迷っていた。

エ 自分の方から押しかけてしまうと、バンさんが他の人たちの中で立場を悪くしてしまうのではないかと迷っていた。